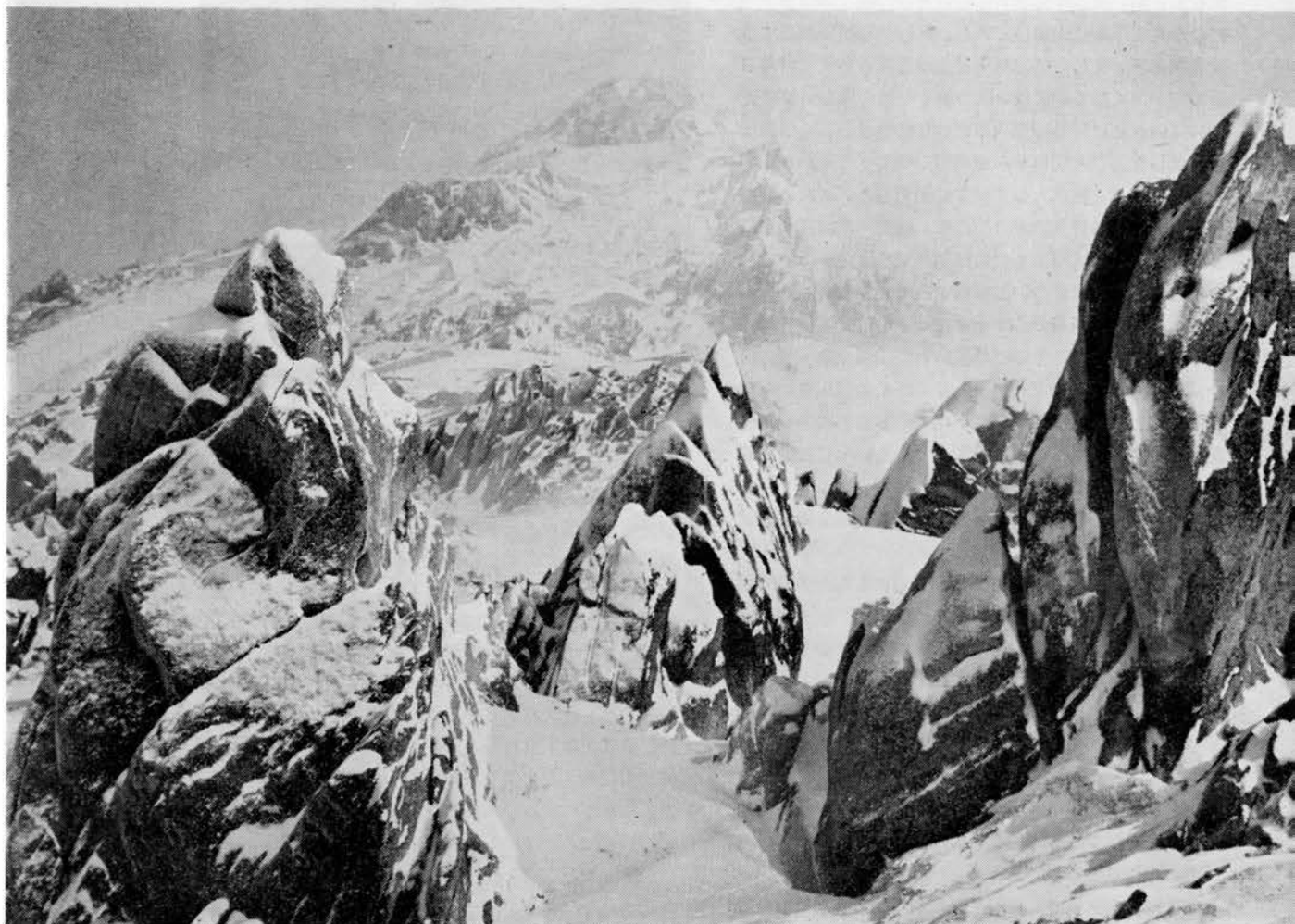


毎月1回25日発行

第3種郵便物認可(昭和35年7月26日) ㊦

# 山と博物館

第 6 卷 第 1 号 1961年1月25日



冬 の 燕 岳

撮 影 山 本 携 挙 氏

大 町 山 岳 博 物 館

# 博物館を支える 新しい力に期待する

阿 部 西 与

## 1 その思い出

昭和26年11月1日、この博物館が開館したときの感激を「大町山岳博物館建設記録」は次のように伝えている。

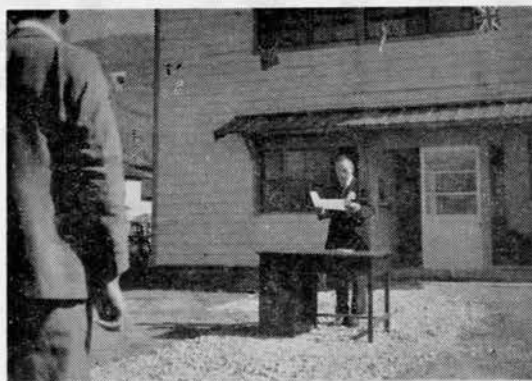
「突貫工事で進められた博物館施設への改築工事は、10月31日もなお続けられていた。公民館からの資料の移転をはじめ、展示作業それに動物舎の整備と開館を翌朝にひかえて作業は山積していた。然し博物館委員をはじめ各関係者、そして南北両高校生の応援もあって11月1日の空が白くなる頃には、ようやく開館作業も終りに近づいていった。屋外の焚火のまわりに集まる多くの顔は創りだした喜びと明日からの希望にほてって赤かった。」

終戦により、日本人のすべてに絶望感と、なにものも信じまいとする虚無感のはびこり、特にそれは青年層に多かった。この大町でもそれは例外ではなかった。

中国から戦争で傷ついた両眼をいたわりながら、大町へ帰ってきた私自身の心が求めたのもやはり「信じ得る人の心」であった。そのとき私は、内山慎三氏（現大町市商工観光課長）をリーダーとする多くの血気さかんな若者たちと知り合った。私たちは大町の青年たちの精神的な支柱を、なにによって建てようかということを相談し合った。そして公民館運動を通じて郷土部、青年部を創設し、これらが中心になって、まず観光協会の設立に成功した。

この博物館の生みの親であり、又いまもなお多くの学芸委員たちの理論的指導者である、羽田健三氏（現信大助教授）と知己を得たもの頃であった。その羽田先生が「信濃大町の白鳥物語」の中に「私は博物館の建設運動に3人の同志を持っていた。1人は記者、1人は駅に勤める人、1人は青年団の幹部であった」と書いておられるが、内山さんと共にその同志の1人であった、当時の毎日新聞記者だった吉川潔氏が、この大町市観光協会の専務理事をしておられるのも10年間の才月の変化をしみじみと感じさせるのである。

山岳博物館開設の政治的な交渉や与論の喚起については、私たちの分担であったが、資料の収集や学術上の分野は、当時の大町南校生物部の生徒たちが羽田先生を中心に基礎づくりをしてくれた。手塚映男、海川庄一、長沢武、降旗良平、平林国男、福島融、中村武久、平林和雄等「オコジョ」の少年たちも、いまは皆りっぱな社会人に成長してそれぞれに活躍している。このあいだこれらの「おとな」たちと久しぶりに羽田先生を囲んで1パイやったとき博物館建設運動や学校時代の思い出に花が



開館の祝詞を読む町長（現市長）

咲き、師弟の愛情の深さに感動したのもだった。あの頃は博物館をつくってもらうために町民大会を開き、街頭演説のマイクでどなり、最後の議会へ傍聴にいて野次ってにらまれたり、糸魚川まで出かけて街頭演説したり「不惑の年」のいまでは、とうていでき得ないようなファイトを燃やしたのもだった。

私たち若者たちの強烈な行動を誤解もせず、むしろ温かく抱きかかえてくれた忘れ得ぬ人々のなかにも、10年の才月は故人ともし、又それらの人たちの肉体にも「時の流れ」を感じるようになった。次の「忘れ得ぬ人々」の功績は、いま市民と文化の名においてあらためて讃えられなければなるまい。（順不同、敬称略）

松田正人（市長）、宮崎文雄（故人、当時助役）、伊藤半二（当時議長）、下川高次郎（前公民館長）、石原守明（当時建設委員長）、伊東伊三郎（市議）、奥原一登（議長）、大日向寅三（当時委員）

このほかの「忘れ得ぬ人々」については、「大町山岳博物館建設記録」にくわしく書かれてあるが、私たちはあらためてこれらの人たちの創設時代の労苦を感謝しないわけにはいかないのである。

## 2 なにを反省すべきか

この10年間「大町山岳博物館」は内外から多くの後援者を得て、すくすくと伸びてきたことは事実である。10年前に神楽町に小さなバラック建で発足した建物は、思い出の南高の校舎を譲り受け、大町公園へ拡張移転した国内の学界や山岳界にもようやくその存在が認められてきたし、中央学界にも有力な指導者を得るようになった。又マス・コミもつねにこの博物館のことを大きくとり上げるようになった。私たち「生みの苦しみ」をした人たちににとっては嬉しいことであった。

ところが博物館に対する批判と危機は、予想もしないところから起きた。

大町市が地財法の適用を受けるということから、35年度予算は大削減をすることになり、市議会議員の1部から博物館に対する攻撃が始まったのである。

「もうからない博物館は閉鎖してアパートにしろ」というような意見については博物館の本質がわからない暴論であるからここでとり上げる必要もない。然し「博物館のPRを強化し、収入の増加をはかれ」とか「学芸的なカラの中にとちこもらずにもっと大衆性を持って」という意見については、確かに10才になった博物館の盲点についていて私自身も同感である。

この10年間に博物館が成長した事実はそのまま認める半面、これからの飛躍に備えてなにを反省すべきかが、この際必要なことなのである。それにつけても思い出すことは、この博物館を最も良く理解してくれる1人としての、籠田総一郎氏(国立自然園次長)がいわれたことばである。「大町山岳博物館が建物がりっぱになることは喜ばしいことだが、それと共に内部の事務処理と対外折衝の円滑をはからなければ、博物館としては発展できない」。

いまここに私たちを含めて反省すべき点を要約列挙してみよう。

- (1) さきにも述べたとおり、創設当時には「1日も早く建設したい」という簡潔な目標があり、またこの地方人の特性として、新しいものにはとびつき易いという共通点もあって建設はスムーズに進んだが、いったん建設してしまったあとには内部の学芸員たちに委せ切りにしてしまった感があった。又、創設当時の有力な協力者との連絡が欠けていた。
- (2) 私たちが創設時代の指導理念とした。(イ)郷土の自然を郷土の人間で守り育てる。(ロ)博物館を中核として、青少年育成の道場とする。(ハ)都会にだけあこがれ流れ出ようとする有為な学生たちをこの地に引き止める方策とする。という精神的な方向が時代の変遷と共にぼやけてしまった。

これはいまの青年団を中心とする20代の若者たちの考え方の相違も指摘されようが、博物館、公民館、教育委員会等の事務局があまりにも「事務屋化」してしまい、ひとつのワクの外にとび出て「若い人間」を発見し、育てようとする気はくくりに欠けていたことも指摘されよう。

いま私たちが欲しいと思う「人間」は、10人の能更よりも、がむしゃらでも良いから大町の自然と人情を愛し、自分を忘れ、権力にへつらわずにとんで歩く、ただ1人の野性の若者なのである。だが然し、いまの時代にこのようなタイプの青年を求めようとする私自

身が、古くなったというのだろうか。それだけに私は終戦直后から自分たちの青春を博物館建設運動に捧げてあばれまわった、内山さんや羽田さんたちの「人間」とあの「時代」が恋しいと思う。

- (3) 「博物館建設記録」の中に記録されている数多くの人たちは、その後各界で活躍しているので、多忙に追われ博物館とのつながりが持たなくなっている。このことは市内の有力者に、博物館の良き理解者が少なくなってきていることを意味する。
- (4) 理事者、教育委員会、議会(特に文教委員会)とはつねに連絡を持ち、PRをすべきである。

### 3 博物館に負わされた新しい任務

「ニュー、フロンティア」ということは最近いわれている。この博物館こそは、10年の間に確かに、大町市と北アルプス地方に新しいフロンティア精神を育て上げてきた。

終戦当時の少年たちは、りっぱに成人して自然と郷土が「世界」の中のひとつとして、どんなにたいせつなものか、この博物館を通じて学びとった。

1人の市会議員から「博物館はもうからないからアパートにしろ」という意見が出たとき、多くの市民はその知性を疑ったものだった。市会の一部で、博物館無用論が、出ているとき、博物館には小中学生の参観者が押しかけていた。そして緑の芝生には、母と子が「カモシカ」のお話をしているのが聞きとれた。いまの博物館はすべての市民の生活の中に呼吸しているのである。

黒部ダム建設にあたって、雨量測定に協力し、生産面に貢献したのもこの博物館だった。

そして「針ノ木自然園」の構想をいち早く打ち出し、厚生省国立公園計画に扇沢地区を集団施設地区として追加せしめたのも、この博物館の研究の成果ではなかったか

「大町山岳博物館」はこの10年間にもしなかったのではない。この地方文化とそして我が国の博物館学と自然の開拓に、いく多の功績を残してくれた。

それは「やらなかった」のではなくして、「やったことを、知らさなかった」ということだけである。

いま、大町市は葛温泉の引湯計画も正式にきまり、黒部ダムも観光客にひろく開放されようとしている。

北アルプスの自然は、市民の生産と福祉に結びついて大きく転換しようとしている。この融合点に立つ新しい任務を遂行できる機関としては、この博物館を他にはないはずである。それは10才の誕生日を迎えた「大町山岳博物館」に市民から与えられた厳粛にして、偉大なプレゼントだともいえよう。

この任務を遂行できるのは、博物館が創設以来持ち続けてきた「フロンティア精神」に、現代の郷土の若者たちが、新しい息吹きを与えることによるのみ可能である。

(国鉄職員・前教育委員)



—楽しくのんびりと—

## 冬の高穂岳

久保田 稔

「弘樹ノトップに立てノ」 時計はちょうど2時を指している。夏とさして変らぬピッチである。それから10分後、菅沢、武田弘樹、そして久保田と三つの右手はガッチリと握り合わされた。「ご苦労様……。弘樹、お前は運のいい奴だぜ、初めての冬山でいきなり頂上に立てるなんて……なあ菅……」 「あゝ、俺達アさんざボッカでしほられたっけなァ」 「俺ア嬉しくて……」 まったく可愛い野郎だ。「半に下山するぜ、めしは下でしよう。」 南の肩にテントが二張り、おそらく奥穂をねらうパーティーだろう、そして西穂へ登ってくるパーティー夏を思わせるようにぎやかさだ。無風快晴とはお世辞にも云えないが、午前中の肌を指す寒風はどこへやら、槍ヶ岳が見えたりかくれたりする様をのんびりと眺めながら熱いミルク紅茶をすゝる、まことにのどかな小春日和の元旦の西穂高岳であった。

年取りと正月を西穂高でやるべく具体的に動き出したのが12月の8日であったから今までの冬山に比べると決して長い準備期間ではない。しかし、また西穂高岳を甘く考えていたのではない。過去の経験と、社会人団体としての勤務条件からくる多忙さを加味しての行動であった。偵察と荷上げは一度も行ってないの、準備は慎重かつ、能率的に行う事が要求された。が、これらの事は実にスムーズには満足出来る状態に運ばれた。

29日夕刻武田武リーダー外6名の隊員は大町山岳博物館に集合、荷物を再点検し、11時就床。

30日午前4時起床、5時半、数人の会員に見送られて小雪ちらつく大町駅を後にする。25日から降り続いた雪がどの程度か心配であったが案の状、鳥々では除雪の為バスをまたされる事1時間、沢渡へ着いたのは1時間半も遅れた10時半であった。腹ごしらえをして11時半小雪舞う沢渡を後にする。積雪は思ったより少なく20㎝くらい、ほゞ30分歩いては10分休むといったペースで進むも、夏ならばバスで1時間位で行くこの道も9貫前後の荷はやはりこたえる。釜トンネルを通過した頃はあたりはすっかり暗くなり、キャップライトの光をたよりに10分ないし15分歩いては休むといったペース。同じバスで入山した或いは次のバスで入山した連中にも追いこされ、我々が一番後になってしまったらしい。トレースもともすれば途絶え勝て冷気はひしひしと身に迫ってくる。上高地の美しい木立の彼方にポツンと灯る帝国ホテルの管理人の小屋の灯を見つけた時、ホッとしたのは私ばかりではあ

るまい。ちょうど7時だった。小屋は満員で我々の為には別棟の畳の部屋があてがわれた。隊員、とりわけ3人の新人（内女性2名）が好調であるのは明日からの行動を考える時心強いものがあった。10時就床。

31日昨日のアルバイトがやゝきつかったので出発を遅らす。9時40分出発。本日もまた小雪である。積雪は1米以上あったが西穂コースは立派なトレースがありさして苦労する事はなかった。過去に登った後立山連峰では見られぬ美しい森林帯を眺めながらゆっくり登る。荷重と時間と、そして新人が半数である事を考え合せ、テントは西穂山荘上部稜線に建設する予定を変更し、山荘まで1時間位の地点に建設する。2時。積雪量は3米以上。4時頃よりはやばやと年取りの準備を始める。2台の石油コンロは気持良く燃え夕食のスキ焼きはうまく、少量のウイスキーに酔い、話しに花を咲かせ、歌声は流れる水の如くとゞまる事を知らず、例年と変らぬ楽しい1960年の最後の一時であった。明日の行動は天気を見てからだ、朝はゆっくりするととのリーダーの決断で就寝は11時25分。5人用のテントに7人は少々窮屈ではあったが……。

明けて元旦6時前に起床。雑煮を作る。少々塩辛過ぎたのは失敗だったが、皆の食欲旺盛なのは炊当餅をゆでるのに大忙しだった。都合で一足お先に下山する高橋を見送って10時15分テントを後に西穂高岳に向う。久方ぶりに太陽が顔を出した。荷は軽いしまづまづ快調なピッチ。わざわざトレースのない夏道をラッセルしたりして1時間ほどで山荘に着く。雪に埋もれた山荘はわずかに屋根が見えるのみ。その屋根の上に煙突から煙たなびく風情は附近の森林とマッチして一幅の名画を思わ



西穂稜線の一行

せる。山荘附近はおびた美しいテントの郡落だ。

山荘を過ぎて、稜線に出ると様子がガラリと変わった。積雪はわずか30釐位、それもカチカチに凍ってアイゼンのツアッケが気持ちよく利く。灌木や岩には細長いシユカブラが積木の様にくっつき何とも言えぬ見事な美しさだ。風は強く、ヤッケのフードをすっぽりとかぶらねば痛くてかなわぬ。

稜線上にはわずか1パーティーが落営していたのみ、そのテントの裏を借りてしばし休息する。附近の山々は時々その姿を現わすもカメラを向けると消えてしまうといった非情さだ。

西穂に至る間に難所といえは、やはり独標の登り。さして困難ではないがある程度の危険はある。ザイルを用いて女性をひき上げる。風はやゝ弱くなってきたものの時間は既に1時になろうとしている。本日の行動は一応こゝまでとして、チーフリーダーの武田と鈴木、上条の女性二名は下山し、サブの久保田と菅沢、武田弘樹の三名は更に2時半まで行動する事に決定。1時半我々は独標を後に前進を続けたが意外にはかどり2時10分、2908米余の頂上に立つ。

下りはまた早かった。特に西穂山荘より下の森林帯の急坂はシリセードで快適にブツとばした。4時テント帰着何の苦労もなくまことにあっけなく目的を達してしまつた。

深いラッセル、強風と吹雪、岩と氷との斗い、苦しくとも辛くともそういったものに耐え勝って頂上を極め、或いはたとえ頂上を極めえずとも喜びは倍加し、感激は高まり、思い出は深い。しかし、時にはこういった気楽な山行もいいかも知れぬ。登山は、それが困難であればあるほど、装備や技術以上にパーティーの和が重要なポイントをしめるだろう。その点、半数が新人である事を考え合せれば、我々が得る事以上に彼等、彼女等は得る所が多かったに違いない。大きな目で今後の事を考えればやはり会の発展の為には大きな成果があった事と思う。

夜、素晴らしい夜だった。月は皓々として照り、高々と伸びた太い樹木は純白の雪の上に黒々と陰を落とし、そんな中に我々のテントからはローソクの灯と楽しい笑い声と唄がこぼれてくる。寒さも忘れ、しばしたたむ。

スケッチブックを持ってこなかったのが残念だ。リーダー曰く、「過去のパリエーションルートの開拓は、このような月夜の晩行動して成功させている。どうだ、我々ももう一度歩くか」10時20分就寝。

**2日** 明日からのアルバイトを考慮し、予備日でもあるので一日沈殿と決定する。ラッセル競争だのシリセードの競争だのと子供のような事を考え言い合い、結局は外に出ず、歌の稽古と喰べるだけ、チーフとサブでアメ



西穂山荘付近の森林帯

リカのオジヤとかいってオートミールに似たものをつくってみたり、非常食、予備食のうまいものをひっぱり出したり、雪に降り込められての沈殿とは違って明るい雰囲気を楽しむ。8時20分就寝

**3日** テント撤収、下山。予定は上高地泊りであったが、翌日少しでも楽をしようと坂巻温泉まで下る事にする。出発11時過ぎ。途中はシリセードやらグリセードやら結構楽しんで帝国ホテルへは12時30分に着く。上高地の白樺林、梓川の清流、このまま下るのは何か心惜しい一日スキーでとびまわっていきたいものだ。坂巻まで下るからと帝国ホテルの管理人である木村さんに今までのお礼を述べに行ったら、入山した時はたて混んでいて話も出来なかったが、今晚は一杯やりながら話合おうと思っていたのに残念がられ、また、大町のうまい酒でももってゆっくりお世話になりに来ますと上高地を後にする。本日は無風快晴の上天気で大正池から眺める西穂ジャンダルム、奥穂、明神、そして手前の焼岳の景観は再びこの地を訪れさせるに十分な魅力と美しさで我々を見送ってくれた。

坂巻温泉着4時25分、一風呂あびて、ほぼ9分通り終了した今回の山行の無事を祝ってビールで乾杯といく、良く冷えたビールは疲れた体に気持ちよくなって安らかに眠る事が出来た。

**4日** どうも暖かだと思ったら外は雨だった。まさか雨にあうとは思っていなかったので誰も雨具用意はなく止むを得ん、あとわずかだから濡れて行くかとはばかり、覚悟をきめて9時出発する。ところがついている時はどこまでもついているとみえて、先程の雨は雪に変わっていた。道のぬかるのは止むを得ないとしても濡れるのだけは助かった。道々小さな雪崩が多発しているので充分注意し、予定通り11時に沢渡に着く、大町へは2時半着、そして、会の新年会に臨み、反省会と団体装備の点検をすませ、この楽しいのんびりとした山行に終止符を打った。

(大町山の会々員)

# 遠山品右衛門翁遺品

向山雅重

遠山品右衛門翁(1851~1920)は、嘉永4年5月18日信州北安曇郡平村野口(現・大町市大字平野口)に生れ大正9年8月28日70才で没した。戸籍上の姓名は遠山里吉、20才ころから高瀬川・籠川を渉り、また黒部川に入り岩魚釣りに没頭。冬期は火縄銃を肩に、熊・カモシカを狩って暮し、その生涯を山に暮し、里の家はほんの仮寝の場所という有様であった。

人呼んで翁を「黒部の主」という。黒部川畔の平(だいら)の小屋を、山林局から保管を依頼せられ、ここを根拠地として釣魚をすること40余年、これ「黒部の主」の名の

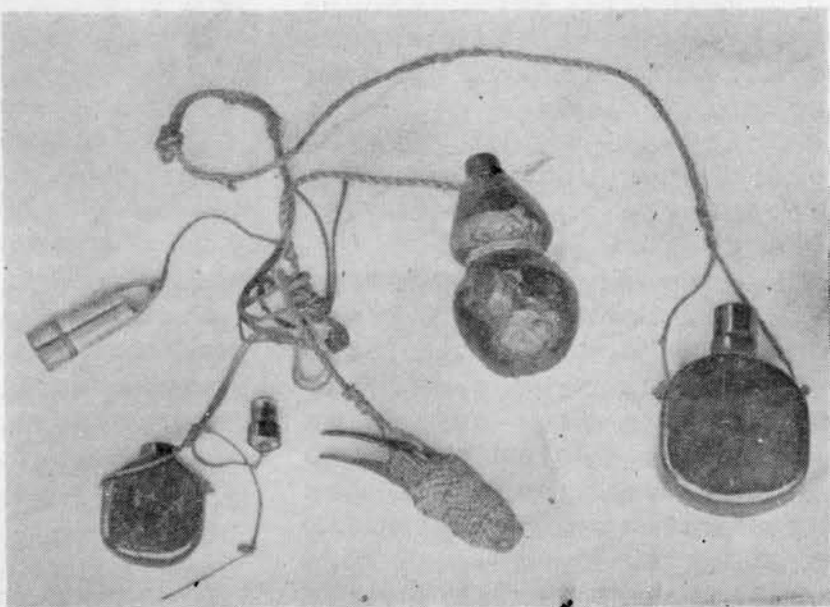
ある所以。翁の足跡は黒部ばかりでなく、南は槍ヶ岳方面、西は有峰附近、北は白馬の諸峰から戸隠方面にも及んでいる。なかでも高瀬川の渓谷などは、大小の渓谷数多く地図に検するさえ容易でないのに、これを翁に問えば、その名称・方向・前後左右などを即答、驚くほどであった由。この点まさに「高瀬の主」ともいうべく、梓川渓谷の上条嘉門治、中房渓谷の小林喜作とならび称せらるべきものがある。

小男ともいうべき体軀、多年山に親しみ、俗気なく、円熟せる風格。自己の冒険談などを語ることがなかったため、針の木峠にて大雪崩に会い、左手の指先だけ雪の面に出ているのを弟らが尋ね掘り起して生命を取り止めたこと、明治28年ころ、高瀬入りの東沢で熊を撃ち、その熊に向脛を噛まれて大怪我をしたなどの話が伝えられているだけである。

その生涯を山魚・山猟にかけた遠山翁の遺品の一部を大町山岳博物館が31年乞うて展示し、今もその大部分が引続き展示されているので、そのごく概要を記し、若干の管見を加えて翁の面影を偲ぶよすがといたしたい。

○襦袢(じばん) — 浅黄染のジバン、袖は筒袖に作られていて、活動に便。夏山冬山を通じて、この上に胸前掛をし、ヨツコギをはいて入山した。

○よっこぎ(しぶよっこぎ) — 釣に猟に使用したもので、冬もこれひとつで雪の中を馳けまわった。モメンの白木地を柿渋で染めたもので作ってある。これはコガ



肩かかけ

キの二番渋、三番渋などえ突き込んで染めたもので、この渋染は、ぬれたとき、水ぎれがよく、風が透らないので、冬山には特にいい。ヨツコギの作りは当地方に行われている裁ち方。後マチが、膝より少し下、脛ねの中ほどで終っており、ソクチがなく、裾がきっちりしており、また、股が自由に広がるのが特徴。

○胸前掛(むなまえかけ) — 紺モメン製、釣りや猟に常用。ドンブリとよばれる前ポケットが便利である。

○腰ふとん — これは翁の遺品ではなく、新しいものであるが、このような腰フトン冬のカモシカ猟に行くとき、腰につけたものである。幅1尺、長さ2尺1寸、モメン布に真綿を入れたもの。

○蒲脛巾(がまはばき) — ガマを編んで作ったハバキ。内側にモメン布がつけてあり、渋染め。雪が付かず水がしみこまず、濡れて乾きが早い。

○踵帽子(あつけぼうし) — 藁を編んだもので踵へあてる。巾3寸5分高さ5寸5分。冬、シッペソをはくときに、踵へかぶせて使用。

○あしなか — 翁は、この型のアシナカをはいて、黒部での岩魚釣りに活躍した。アシナカはもともと簡易な履物。ツマ先がよく効きアシナカの語そのものごとく底が短いので踵もよくきき、なおアシノウラのところへ小石や砂など入っても流れて直に払える便利があり、溪流の釣りにはもともと便利である。

○輪かんじき(わかんじき) — これは現在ないが、





明治44年8月29日 黒部小屋にて撮影

牛の生皮で巻いてノリヲ(乗緒)を作り、丈夫なもの。

○背中当(せなかあて) — カモシカの毛皮製の背負袋、巾9寸、高さ1尺1寸。寒さにまけず雨が透らず理想的なリュックサック。冬山に愛用したもの。

○皮囊(かわみの) — カモシカの毛皮で作ったミノ雨具・防寒具・寝具として一年を通じて使用したもの。これは現在、本館に置いてない。

○帽子(ぼうし) — 休養の時、家で使用したもの。

○煙草入(たばこいれ) — キセルのほかは、全部自分で作ったもの。カモシカノ角、熊の歯などを使っている

○火打ち(ひうち) — ヒウチ袋、ヒウチ石、ヒウチ金、それにブナの木で作った炭を入れる木筒の4つから成っている。火をつけるには、まずキセルに煙草をつめその上にブナの炭をのせ、ヒウチ石をヒウチ金で打って火花を出し、その火を炭につけ、煙草を吸いつけ、次にタバコの火で、ワラジのいたんだものからワラクスをとり、そのワラクスにつけて火を焚いたもの。翁の山生活を通じて、常に手離せなかったもの。

○汁でんこ(しるでんこ) — 径4寸3分、高さ3寸白木のままの曲物製で、しっかりした蓋がついている。常盤村(大町市常盤)の産。味噌・漬物などの汁物を入れて山へ持っていったもの。

○横面桶(よこめんづ) — 高さ3寸3分、長径7寸小判なりの曲物製、内朱外黒の塗り、信州福島町(木曾福島)の製造。これに飯をつめ、汁でんことともに、麻縄で網に編んだスカリに入れて背負っていった。

○ちぶくろ — 犬の毛皮で簡単に作った腰袋・巾8寸5分、深さ5寸5分、扁平な袋の一方が蓋皮になって4寸ほどのびている。これに飯の残りとも米の粉をこねて、テノヒラ大にして2枚、ほかに塩を少し入れ、腰にしばりつけて昼食に持って行く。犬の毛皮の袋に入れ腰につけているので寒いときも凍ることがない。カモシカなど獲ったときはその肉に塩をつけて生まで食べた由。本品は品右エ門翁が使用したものを、野口の遠山林平氏が買ったものである。

○肩かけ(かたかけ) — 狩猟に火縄銃を使っていたので、これを受用していた。火薬入れ、弾入れ、火縄入れを紐でつないだもので、これを頸に掛け、胸前掛のなかに入れて出かけていったもの。

○釣竿(つりざお) — ホテイチクでこしらえた無造作な作り。太い方が3尺6寸、その先に継いだと見られる細いものが4尺6寸。

○受け網(うけあみ) — 釣った岩魚を受ける網。現在ここにはない。

○かわ鉢(かわばち) — 魚鉢。黒部に釣りしたとき使ったもの。深さ7寸、巾1尺、長さ1尺9寸。クロベの樹皮をシナの皮の糸で縫って作ってある。山でクロベの皮を剥いで作り、この鉢を水に浸して釣った岩魚を生かして置くのに使ったり、岩魚をつめて里に背負って帰る運搬用に使ったもの。現在でも奥山へ釣りに行く人は使っている。この製作法はふるく木曾あたりから入ったものかと言われている。(1961.1.1.2記)

## チヨウゲンボウ

長 沢 修 介

ハヤブサ科の中形のタカであるこの鳥は飛んでいる時は翼が長く尖っており尾も後に長く出ているが頭が翼より前にほんのわずかしか出ていない。飛んでいる時は杜鵑科の鳥に以ているがタカ類の特徴である帆翹をたびたび行うので区別がつく。

早春の3~4月頃から早くも蕃殖をはじめ。崖地のくぼみや低木の根元を巣として巣材は全く何も使用しないでそのまま卵を産む。

チヨウゲンボウの集団蕃殖地として名高い長野県の十三崖は下高井郡の高社山の裾を流れる夜間瀬川の畔にある第三期砂質土壌の延長1,800m、高さ33mの崖である1950年細野氏によって20つがいほどの集団蕃殖が発見され1953年天然記念物に推定された。その他山梨県の鷹の巣、観音岩等の崖地にも多数の集団蕃殖が近年発見された。早春から蕃殖を始めたチヨウゲンボウは蕃殖を終えると高山で夏を過ごすものもあり冬になると低地や村落に



も姿を見せる。

ハタネズミ、アカネズミ等のネズミ類を多く食べヒバリやカワラヒワなどの小形の鳥類も捕食する。食物はタカ類やフクロウ類の特徴として丸のみにしてしばらくしてから不消化物はペリットの棒状の塊となって吐き出される。

(山博 調査員)

## 博物館友の会

- 千葉先生/リンゴも切るですか、
- クマはうまいものたべてるなあ、
- これなんて云う鳥?大きいね、
- ワシ/おそろしい目だね、
- ぼくのくれた肉、あっ食べてるよ、
- これかわいいね、
- だけどクサイね、
- キツネも肉食動物だね、
- 先生/タカとトビとどこがちがうんですか?
- あ、そうか……なるほど、
- 平林先生がカモシカ出して来たぞ、
- ざわってみるか、
- おっかねえなあ、あったかいね、
- やわらかい毛だね、
- 私もほしいなあ……、
- 皆集まれ、まとめの話し合いをしましょう、
- (テレビニュースのしゃしん機のネジの音がジーツと鳴っていた。)

これは、友の会のもよおしもの「動物にえさをくれる会」のメモから拾った一節である。博物館友の会は大町山岳博物館の普及団体として小学校4年以上中学生・高

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料170円(郵送料とも)を現金書留または郵便替為、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。  
大町山岳博物館

校生の有志で組織されている。この会は博物館と協力して、めぐまれた大町周辺の大自然のふところの中で、お互いに楽しみながら協力し合って、自然現象やそこに住む人々の生活の姿を学んで行くことが目標になっている。各学校から選出された先生方と博物館の関係者、あるいは、この運動に理解のある一般市民の有志で組織された指導者によって、一人でも多くの者が身のまわりの自然に親しみ、力いっぱい生きていく自然や人の姿の中から自分たちの人格形式に役立つものを拾って行くべく努力している。

この会では、ガリ版刷りのささやかな会報「友の会だより」を発行し、会員の観察や研究時には希望、感想など、思い思いの考えを発表し合い、会報を軸とした野外観察、研究会、リクリエーションの催しと多様な活動を北アルプスの山麓で展開している。

謹 賀 新 年

大 町 山 岳 博 物 館

山と博物館 第6巻第1号 1961年1月25日発行  
発行所 長野県大町市TEL(大町)211  
大町山岳博物館  
印刷所 大町市上中町  
信州印刷大町工場